

特集
まえがき

特集

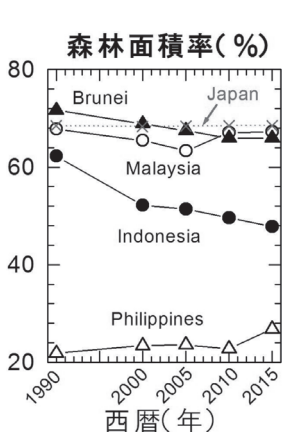
東南アジア島嶼部熱帯林の 保全と再生

神前進一

東南アジアの熱帯林は、生物多様性のホットスポットであるだけでなく、泥炭湿地は炭素貯留量の大きさから気候変動のカギを握るとされるが、森林消失や劣化で熱帯林は炭素の純排出源になったとの議論も生まれている。

東南アジアでの熱帯林消失は、1960年代のフィリピンでの日本向け木材伐採を端緒に、やがてボルネオ島のサバ州、サラワク州、インドネシアへ移行し、島嶼部のフタバガキ科熱帯硬木が違法伐採の割合の高い商業伐採の対象となり急速に失われた。2000年代に入り、島嶼部ではアブラヤシや早生樹への転換で、これまで開発の波が及ばなかった泥炭湿地が、地域的にはボルネオ島が森林消失の中心地となり、新たな諸相を呈している。

FAOのGlobal Forest Resources Assessment 2015¹⁾によると、島嶼部が大陸部より森林減少率が高いが、国ごと違いが際立つ。フィリピンは森林面積率が1990年の21.9%から26.8%まで回復した。インドネシアは1990年代に世界最大の年間-1.7%の森林減少を記録したのち-0.3%まで低下したが再び-0.7%に上昇、森



林面積率は62.2%から47.8%へと激減した。マレーシア(含半島部)は森林面積率67%台を維持しているが、原生林は22%と低い。ブルネイは原生林割合が69%と際立って高い。近年は衛星画像

の解像度と解析技術が飛躍的に進み研究が活発化している。リアルタイムでの森林被覆の把握がGlobal Forest Watchのインタラクティブな地図で可能となり、NGOは衝撃的な事実を次々に発表している。

Miettinenら(2011)²⁾は東南アジア島嶼部では毎年1.0%の森林が消失し、泥炭湿地林は2.2%、低地熱帯林は2.1%と減少率が高く、特にスマトラ島東部低地とサラワク州の泥炭地では年率5.0%以上減少し、半分以上の森林がこの10年間で失われたとしている。Stibigら(2014)³⁾は東南アジア島嶼部、特にスマトラ島東岸とボルネオ島に森林消失の集中地域が見られ、アブラヤシへの転換、非持続的伐採、早生樹の産業造林が3大要因で、ボルネオ島内陸部への森林消失の拡大も指摘している。

本特集では、スマトラ島とボルネオ島での森林破壊の最大の要因とされるアブラヤシ栽培を持続可能なものに変革するRSPOの取り組み、気候変動への大きな脅威である泥炭地破壊とその回避策などが論じられ、熱帯林保全への具体的手段が示唆される。

注および参考文献

1) FAO: *Global Forest Resources Assessment 2015*. (2015)

この数字は2010～11年の各国からの報告に基づく推計値で、客観的に同一基準との保証はない。またFAOの森林の定義では、アブラヤシ農園以外のゴム園や早生樹産業植林地が含まれること、択伐後に劣化した森林も林冠が地表の10%あれば森林とされる点など批判が多い。

2) Miettinen, *et al.*: Deforestation rates in insular Southeast Asia between 2000 and 2010. *Global Change Biology*, **17**, 2261-2270 (2011).3) Stibig, H. J. *et al.*: Change in tropical forest cover of South east Asia from 1990 to 2010. *Biogeosciences*, **11**, 247-258 (2014).

(こうさき・しんいち: 『日本の科学者』客員編集員, 人文地理学)